

全 体 講 評

「手づくり郷土賞」は、地域の個性、魅力、活力を創出している各種の良質な社会資本を広く発掘し、これを紹介することによって地域づくりの一助とすることを目的に昭和61年度から実施しており、今回で20回目を迎えました。

今年度からは、過去に「手づくり郷土賞」を受賞した後も永く良質な社会資本と認められ、現在も積極的に維持・活用されるなど、地域に定着しているものを対象とする『大賞部門』を新たに設けました。これにより、従前より実施してきた『地域整備部門』及び『地域活動部門』と併せ、3部門になりました。

この20年間を総括すると、創設当初に比べ、応募案件の多くが住民自ら考え、判断して、行動するという構図のもとに行われており、参加と連携によるふるさとづくりが各地に定着してきたのではないかと考えるところです。

さて、今年度の応募案件をみると、以下のようなことが言えます。

まず、『地域整備部門』では、計画段階から住民、企業、行政など多様な主体が連携をし、周辺の自然環境や景観に配慮をしながら、中心市街地の活性化などの個別の課題に取り組んでいる事例が見られるようになってきています。これらの事例では、住民と行政が一体となって地域に根ざした社会資本の整備をし、それを活用していこうという意識の高まりが強く感じられました。

次に『地域活動部門』では、近年の自然環境に対する意識の高まりともあいまって、住民による植栽や清掃などの取り組みが多くなっています。また、歴史的、文化的な資産を活用した地域振興の取り組みや、中心市街地の活性化のための活動など、住民が地域の特色をしっかりと見据えながら、自ら参画、活動している事例が多く見受けられました。

最後に『大賞部門』では、今年度は、昭和61年度～平成2年度に「手づくり郷土賞」を受賞したものを対象として公募しました。いずれの応募物件も受賞から15年以上という長い期間が経過しているにもかかわらず、それぞれの活動団体の創意工夫をこらした継続的な活動により、個性的で魅力あふれるふるさとの創出に大きく貢献していました。

全体を通して、住民と行政の協働により地域の個性や魅力が創出されており、このような取り組みが全国的な展開を見るに至ったことは、「手づくり郷土賞」の意図していたことが定着した証左とも思えます。

また、受賞後10年以上を経ても地域に愛され、利活用されている社会資本が相当数に上ることは、これらの取り組みが時間を乗り越えて生きていることを実感させるものです。

今後も多くの活動主体が地域の整備に関わり、愛着を持って社会資本を活用することにより、コミュニティが活性化し、個性的で魅力ある地域がより一層増えてゆくことを期待します。